RIBENDANGDAIDUANPIANMINGZUOSHANGX

日本当代短篇名作赏析

○由同来 编著

南开大学出版社

日本当代短篇名作赏析

由同来　编著

南开大学出版社
天　津

图书在版编目（CIP）数据

日本当代短篇名作赏析/由同来编著. —天津：南开大学出版社，2010.3

ISBN 978-7-310-03365-2

Ⅰ.①日… Ⅱ.①由… Ⅲ.①短篇小说—文学欣赏—日本—现代 Ⅳ.①I313.074

中国版本图书馆CIP数据核字（2010）第023268号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人：肖占鹏

地址：天津市南开区卫津路94号 邮政编码：300071

营销部电话：(022)23508339 23500755

营销部传真：(022)23508542 邮购部电话：(022)23502200

*

天津泰宇印务有限公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2010年3月第1版 2010年3月第1次印刷

880×1230毫米 32开本 13.5印张 385千字

定价：22.00元

如遇图书印装质量问题，请与本社营销部联系调换，电话：(022)23507125

前　言

在当今科技物质文明高度发达带来的“电讯图像时代”，尽管为人们提供了多种文化消费的可能，但应该说，人们对文学的需求仍然是不可或缺的。正如美国评论家韦勒克所言：“文学告诉我们什么是人、自然、社会和生命的意义。它具有认识的、社会的和道德的功能”。每一个时代的伟大严肃的文学名作，都记录着那一时代的作家对社会人生的思考。他们以丰富的想象力和奇妙的构思，从各自独特的视角，对现实生活加以再现，引导读者复活久远的记忆，回眸历史，认识社会，体悟人生。我们读者对作品的解读鉴赏，同样是对人的精神世界的一次探索之旅，它可以滋养培育我们的智慧和感悟力，帮助我们认识社会与人生，进行自我调节，以适应复杂多变的当今社会。

在《日本当代短篇名作赏析》一书中，选取了在日本当代文坛最具代表性、最具才华的10位作家的短篇小说各一篇。这些作家分别为：在海外最负盛名、在日本携手领跑日本当代文学的村上春树、吉本芭娜娜和村上龙；在日本经常排在畅销书首位的大众文学作家赤川次郎；在日本战后出生的作家中第一位芥川奖获得者、有“日本福克纳”之称的中上健次；在当今日本文坛上最能代表当代的、最受青睐也最具争议的山田咏美；在战后第一位以年仅20几岁的年龄便摘取最具文学权威性的芥川奖桂冠的小川洋子；在日本岸田国士戏曲奖（与芥川奖齐名）历史上最年轻的获奖者旅日韩裔作家柳美里；在日本最后一个文学流派——内向派中最具代表性的作家古井由吉等。本书所选作品皆为代表作，有的获得芥川、海燕等文学奖；有的被选入日本高中国语教科书或大学日本文学读本中。所选作品发表的时间为1976年至2000年之间。这些作品都已经受住时

间的洗礼，都能经得起长久的阅读，在众多作品中脱颖而出，得到了评论家的一致好评。

古井由吉的《玩偶》，通过对主人公内心的凝视和对其病态心理的描写，揭示了现代人在都市中面临的生存困境。小说引导人们去认真思考在经济飞速发展、现代化和城市化迅猛推进过程中所产生的精神危机和情感危机等诸多社会问题，让人们仔细观察被日常性遮蔽的生活真相，借此直接叩问现代人的自我迷失，以便使他们重新找回业已失落的更为本真的生活。**赤川次郎的《纪念照》**，以洗练精致的文字、新颖别致的构思、层出不穷的悬念和出人意料的结局，以小见大窥视了日本当今社会日趋严重的自杀问题。作者呼吁人们，在发现他人陷入人生困境之时，应及时伸出援手，帮其走出自杀的阴霾，重铸幸福人生。**吉本芭娜娜的《厨房》**，以女性作家特有的细腻绵密描绘出现代都市年轻人的丧失感和再生。虽然作品中弥漫着浓郁的死与孤独的气息，但丝毫不给人以消沉哀伤之感，因为主人公美影在“亲情”的呵护下，最终走出了死亡与孤独的阴影，重获新生，变得坚强自立，能够独自直面人生。芭娜娜作品中流露出的这种达观坚强的人生态度，无疑有益于提升人的生命质量，她教会了人们该如何面对死亡和人生中的不幸，如何从绝望中站立起来，如何找寻到生命的希望和力量。**村上龙的《公园》**，集文学性、通俗性和思想性于一体。小说以散文化的笔触为读者描绘出现实生活中的一种“原生态”，作品并没有止步于对男子动物性本能的揭露上，而是将矛头直指西方资本主义社会所蕴含的、因一味贪图享乐和追求刺激而导致道德、理想丧失这一严重的社会弊端。作者希冀通过暴露资本主义制度中存在的这种矛盾和病症，来找寻一种全新的生存方式。**山田咏美的《海边的孩子》**，是一篇刻画青少年敏锐感性和自我意识的小说，作者以第一人称叙事方式，讲述了女主人公“我”九岁那年一段刻骨铭心的经历。她在与住在海边的、拥有大海一般自信、坦荡和宽阔胸襟的同班同学哲夫的交往中，深深地被其率真自由的生活方式所打动，最终彻底抛弃掉了世俗的伪善。**中上健次的《里巷》**，反映的是生活在“里巷”中的人们的爱欲和爱情

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

故事。作品始终围绕着男主人公与妻子和情人之间的感情纠葛来推动小说情节的展开，并借此揭示出主人公在爱欲和爱情之间的徘徊。小说在结尾强烈地暗示出爱欲对爱情和理性的挑战。从中可以看出，中上在其描写性爱的代表作《赫发》中所追求的、视爱欲为人生唯一目的的畸形情爱观，在《里巷》中已渐显端倪。**小川洋子的《妊娠日历》**，采用日记体的形式，以冷峻的笔触，记录了“我”（妹妹）观察和照顾姐姐从怀孕到生产的全过程。这是一部带有浓厚后现代主义特点的作品，小说的文本是开放性的，主题也不是单一的。从姐姐对妊娠和即将出生的婴儿的恐惧与不安中，从“我”打算让姐姐吃含有毒素的葡萄柚果酱而欲破坏其腹中胎儿染色体这一怀有恶意的行动中，我们可以窥视到作者的创作意图。它既表现了母性神话的破灭，也反映出女性要求消除性别差异的强烈呼声。同时也表达了作者对高科技可能给人类和大自然的未来带来严重后果的一种深切忧虑。**奥泉光的《石头的来历》**，是一部具有鲜明后现代主义特点和意蕴深厚的小说。作品为了彻底弄清那枚绿色硅晶岩“石头的来历”，在空间和时间上不断进行切换，时而是菲律宾吕宋岛的洞窟，时而是秩父采石场的山洞；时而是战前，时而是战后。小说完全打破了时空界限，把幻想和现实融为一体，勾画出一个丰富多彩的想象中的世界，反映了作者对日本从战败前到上世纪七十年代这一段历史的独特思考和反思，力图证明在战后的日本社会中还存在着暴力传承的现象，军国主义思想依然存在，日本仍有重蹈历史覆辙的危险。**柳美里的《家庭电影》**，采用了“跨界”和“拼贴”这种后现代主义小说惯用的手法，将诸如场景的转换、人物的道白这些戏剧艺术中的要素移植到小说里。在作品中，主人公素美担当起叙述者这一角色。她时而以第一人称，时而以第三人称，穿插在人物的台词之间进行叙事，她同人物的台词一同构成了小说的两个并行的叙事手段。而且，作者借助场景的转换，将“家庭电影”的脚本部分与描写“素美与变态雕刻家之恋”的小说部分有机地拼贴在一起，对家庭解体的真实原因进行深入的挖掘和详尽的剖析，并借此叩问家庭在现代社会存在的价值。**村上春树的《泰国之旅》**，是一

部“观念小说”。在浅层文本中，作者描写了病理学医师早月在曼谷请老女巫算命后，完全相信其预言，在回国的飞机上，准备睡上一觉，等待梦中出现的绿蛇将自己腹中的石子吞下。而在小说深层文本里，作者的立足点却是在写一位受过现代高等教育的社会精英如何走向神秘主义而变成“空壳”的过程以及她人性中的恶有可能被引爆而产生暴力倾向。作者欲借“空壳精英”早月的形象告诫人们：倘若我们像早月那样没有意识到自身的“空壳”境遇，没有意识到自身人性中的恶在受到邪教组织的“恶的照射”后所产生的巨大可怕的暴力倾向，而一味地想借“梦的到来”（皈依邪教）寻求解脱的话，那么诸如东京地铁沙林暴力事件，今后还必将发生。村上运用象征和暗喻的手法，巧妙地对 1995 年发生在东京地铁的“沙林暴力事件”的深层原因、教训和意义进行了深刻的反思和总结。这篇小说显现出了与村上以往作品迥然不同的创作风格，强烈地表达了作者“干预社会”的意识。

本教材是作为大学日语专业高年级教材编写的，亦可供有一定日语基础的学习者参考使用。为便于阅读与欣赏，每篇作品后，均附有词语注释、作者简介、代表作指南和详尽的赏析文章。编写这部教材，旨在为广大读者提供一个了解日本当代文学和当今社会的窗口。并想通过作家及其代表作介绍和笔者的赏析文章，来帮助读者领略到日本当代文学的概貌和魅力，借以开阔视野，提高分析鉴赏作品的能力。此外，本书所选作品，大都是用口语或是经过加工的口语写成的。因此，阅读这些小说，无疑会对读者提高口语能力和掌握地道漂亮的日语口语大有裨益。

本书在编写过程中，参考了日本部分学者的最新研究成果，在此谨致谢忱。这部教材得以问世，还应感谢张华编辑的提议和勉励，在这里也向张华老师表示衷心的谢意。

天津外国语学院日语系　由同来

2009 年 10 月

目　录

第一課　人形 …… 1
一、本文 …… 1
二、語釈 …… 17
三、略歴と文学 …… 22
四、代表作ガイド …… 23
五、《玩偶》賞析 …… 26
第二課　記念写真 …… 31
一、本文 …… 31
二、語釈 …… 35
三、略歴と文学 …… 37
四、代表作ガイド …… 39
五、《纪念照》賞析 …… 40
第三課　キッチン …… 45
一、本文 …… 45
二、語釈 …… 79
三、略歴と文学 …… 82
四、代表作ガイド …… 84
五、《厨房》賞析 …… 87
第四課　公園 …… 94
一、本文 …… 94
二、語釈 …… 102
三、略歴と文学 …… 105
四、代表作ガイド …… 107
五、《公园》賞析 …… 109

第五課　海の方の子 113
一、本文 113
二、語釈 125
三、略歴と文学 128
四、代表作ガイド 130
五、《海边的孩子》賞析 133
第六課　路地 138
一、本文 138
二、語釈 162
三、略歴と文学 166
四、代表作ガイド 167
五、《里巷》賞析 169
第七課　妊娠カレンダー 174
一、本文 174
二、語釈 213
三、略歴と文学 219
四、代表作ガイド 221
五、《妊娠日历》賞析 224
第八課　石の来歴 229
一、本文 229
二、語釈 299
三、略歴と文学 308
四、代表作ガイド 310
五、《石头的来历》賞析 311
第九課　家族シネマ 319
一、本文 319
二、語釈 372
三、略歴と文学 379
四、代表作ガイド 381
五、《家庭电影》賞析 382

第十課　タイランド……388
一、本文……388
二、語釈……407
三、略歴と文学……410
四、代表作ガイド……412
五、《泰国之旅》赏析……414
主要参考文献……414

第一課　人　形

古井由吉

一、本文

人形を抱えて郷里から東京へもどった直後、郁子は週に三度も人違いをされた。

まず月曜日の夕方、勤め帰りの地下鉄からホームへ押し出される瞬間、耳もとでふいに、「あっ、間違えました」と男の声がした。ホームへ降りて振向くと、確かに三十年配の男が郁子の顔を見て、われとわが目を疑うような苦笑を浮べていた。そう言えば、電車がホームに停まった時に、扉のほうへ寄る乗客を押し分けて、誰かが懸命にこちらへ近づいて来る気配があった。何を焦っているのだろうと思った覚えもある。それにしても、間違えましたと言われて、振向いて、人違いされたことにはじめて気がつくというのも妙な体験だな、とあの夜はそう思っただけだった。

それから木曜の夜、今度は本格的な人違いをされた。郁子は人と会うために、閑散とした地下鉄の階段を通って暗い通りに出た。するとやはり三十年配の男が向いからやって来て、郁子の正面でびっくりしたように足を止め、「矢島さん…どうして、こんなところに」と叫んだ。「違います」と郁子は言った。そして呆気に取られている男に、「人違いです」と顔を一度まともに向けて見せたが、その時、なにやら言訳か許しを求めるような響きが声に混ったのに我ながら驚いた。しばらく行って振返ると、男はまだそこに立ってしきりに首をかしげていた。

こんなに真正面から人違いされたこともなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

金曜の夜は、相手は郁子よりすこし年上の三十前後の女で、道の真中で曖昧に止まって、向かいから来る郁子の顔をしげしげと眺め、ときどき笑いかけそうにしながら、郁子の顔に笑みの浮ぶのを、待っていた。人違いであるしるしに郁子は相手の目をまともに見て通り過ぎ、厭なことが続くなとちらりと思ったが、たいして気に留めたわけでもなかった。

そうは言っても、それから二、三日は、また人違いされるのではないかという憂欝さがうっすらとつきまとった。五日目の水曜に、今度は長年の女友達が郁子のことを人違いした。

「あなた、先週の土曜日の二時頃、下北沢の駅に降りたでしょう。電車の中から姿が見えたので、降りて声をかけようとしたけどやめておいた。なんだか、いい人に逢いに行く様子だったもの」

女友達は郁子の顔を見るなりそう言った。

「そんなはずはないわ。わたし、下北沢なんて駅に降りたこともないわ」

郁子は相手の間違いを正そうとして、奇妙なことにふいに焦りのようなものを覚え、思わずムキになりかけて、顔をあからめた。その日のその時刻、まるで別の沿線だけれど。郁子は前夜遅く酔って泊まりこんだ恋人のアパートに居た。まだ裸だった。そしてもう一人の男性のことを思っていた。二人の恋人の間で、我身を罰するように、心身がますます空虚になっていった。人形のいる自分の部屋へ早く帰って、二人のことを忘れ、我身を取りもどしてぐっすり眠りたい、とひたすら焦れた。まだ眠っている男をおいて雨の中へ出て行く自分を何度も思い浮べながら、もう終りかけた関係の馴染んだ温みが惜しくて、ぐずぐずしていた。

女友達は訳知り顔に笑って、いくら郁子が人違いだと言っても耳に入れてくれなかった。どのみちあんなことをしていたんだから、それならそれでいい、と郁子も思い直してかけた。ところがその途端に、さっきより一段と鋭い不安におそわれて、自分でも思いがけないことを口走った。

「あなた、それ、ほんとにあたしだったの」

「あたしにたいして、隠すことはないでしょう」

女友達は鼻白んだが、郁子の真剣な顔を見ると、ちょっと怯えた目つきになり、薄膜のようなものが頭にかかってきた。

「あなただ、と感じたのよ。でも、人の目はあてにならないから、ひょっとして違うかもしれない、ともその時には思ったのよ。でも、さっきあなたの顔を見たとき、ぜったい間違いないと思ったんだわ。ま、そんなこと、どうでもいいじゃないの」

「ねえ、助けて、これはどういうことなの」

その夜、部屋にもどって、郁子はベッドの上から人形に訴えかけた。

「週に四度も人に間違えられるなんて、間違えた人のほうがあんなに心外そうな顔をするなんて、あたしはいったい誰なの。あたしはあたしでは、あたし一人では、なくなってるの。大勢のあたしがあちこち歩き回ってるの。あなたは人形だから、そういうこと、わかるでしょ」

人形はタンスの上からベッドを見おろして笑っていた。背丈五十センチはあり、赤い振袖を着て、こんな殺風景な部屋に置くのも気がひけるほど愛くるしいオカッパ髪の下ぶくれの顔をこころもち伏せ、いつもそっと微笑んでいるのだが、郁子がムキになってたずねるたびに、笑みがひときわくっきりと浮んで、おかしがっているように見えた。郁子も吹き出してしまった。

「ごめんなさい。恥かしいこと。まさか、あなたをこんなに頼りにするようになるとは、思ってもいなかった」

実際に、人形みたいに薄気味の悪いものを部屋に置いて大切にする人の気が知れないと日頃から思っていた郁子は、選りに選ってこんな大きな人形を伯父のところからもらってきてしまったことを、新幹線の中でもう後悔していたものだった。

自分一人の戸籍を東京のこのアパートの住所に分けることに決めて、伯父の家を出るその朝、伯父が郁子の顔を見ないようにして、

「郁を蔵へ連れて行って、好きな人形をひとつ分けてやれ」と突慳貪な声で伯母に言った。伯父の最後の心づかいに、郁子は両手を畳について、

「ながながお世話になりました」と出にくかった別れの挨拶を済ませた。

「あなたがその気になりさえすれば、伯父さんはあなたをこの家の養女にしてからお嫁にやってもいいとまで思っていたのに」と伯母は愚痴を言いながら箱の塵を払って中から小さめの人形を取り出した。女の子たちの遊んだ着せ替え人形で、明治の頃からこの家にあるという。死んだお母さんもこの人形で遊んだのかしら、と郁子はたずねかけて、遅くこの家に嫁いだこの伯母がそんなことを知るわけもないことに気がつき、黙って人形を手に取った。

すぐ目の前にあるのに、薄明りの中へ徐々に徐々に浮び上がってくるような、白い顔だった。手の動きにつれ、目の動きにつれ、さまざまな表情が切れ長の目から、口もとから、あらわれては消える。余りぎれで縫った新しい衣裳を着せる時には、さぞや女の華やぎが顔にこぼれたことだろう、少女の心もさぞや華やいで、二人ははてしもなく女の会話を続けたことだろう、と郁子は思いやった。今の世の少女たちよりも、時間はゆっくり流れて、どうかすると夢の中に深く深く、母親が遠くで呼ぶまで、淀んだことだろう。人生はゆるやかな反復にすぎなかった。つい昨日まで着せ替えを遊んでいた少女が嫁に行き、その子がいつのまにか同じ遊びをしている。そのことを少女たちはおのずと知っていた。人形遊びの中では反復そのものになりきっていた。

しかし身の衰えを覚えた女が、大事にしまわれた娘時代の人形を、つくづく憎むということはなかっただろうか、と郁子は思った。人形は一緒に年老いてはくれない。昔、人形は少女の夢をはてしもなく受け入れてくれた。しかし今では、その後の女自身の人生のほうが、人形の見る一夜の夢のようにしか感じられない。やがて女が息を引き取るとき、人形は箱の中ではっと夢から醒めた顔をするかもしれない。

人形というものは、少女よりも生きながらえてはならないものでは

ないか。少女の夢と厄災を身代りに受けて、川に流されるか、火に焼かれるか、とにかく消えてくれなくては困るじゃないか。

人形は主人を呼ぶ、ということを聞いたことがある。しかし人が人形を呼び、人形を恨み、老い死にの道連れにしようと狂うこともあるのではいか。三十歳で死んだ母親も、この人形の白い顔を病床から思ったのだろうか…。

「折角ですけど、わたしにはもったいないわ。それに、わたし、子供の頃から、お人形はあまり好きじゃありませんから」

そう言って郁子は人形を箱にしまった。伯母はそれには答えず、もうひとつのかなり大きな縦長の箱を郁子の前に置いて蓋をゆっくり開けた。箱一杯に人形が和紙に包まれて仰向けに横たわっていた。顔にも黄ばんだ紙がかぶせられ、黒髪が妙になまなましくのぞいた。郁子は目をそむけた。しかし伯母の声におそるおそる振向いたとき、思わず微笑んでいた。

長持の上に、小さな窓の薄明りを受けて、振袖姿のオカッパの女の子が立ち、目をこころもち伏せて笑っている。顔は白くはなくて肌色だった。暗がりの中からぼうっと浮んでくるような顔ではなくて、そこにちゃんとあり、どこからどう見ても、愛くるしく微笑んでいた。黴臭い床に低くしゃがみこんで、郁子は人形を見上げた。

そしてその恰好の子供っぽさを太腿のあたりに感じながら、人形と一緒に笑っているうちに、この子がそばにいてくれれば、わたしもまだまだ人に愛される、とそんな気がしてきた。

「気に入ったらしいね」と伯母は郁子を眺め、ちょっと惜しそうにためらってから教えた。

「じつは伯父さんも、これを郁にやれと言っているんだよ。わりと新しくて、昭和の初めのものだけど、持って行くところへ持って行けば三十万はする値打物だそうだ。伯父さんはあんたのことを、もう顔も見たくないと言ってますけど、一人暮しをそれは心配しているの。郁には値打ちのことを話すなと言われたけど、何も知らずに人にあげてしまったら困るものね」

物心両面からさりげない支えを受け、郁子は伯父に向かって胸の内で手を合せるようにして家を出た。しかし荷物をおろしてタクシーを停めるのが面倒なばかりに歩いていくうちに駅の手前で雨に降られ、両手がふさがっているので傘もさせずによたよたと走り出した時には、大きな人形の箱をもう邪魔物と感じていた。駅舎へ駆けこんだ後も、することなすこと手順が前後して、ハンドバッグと鞄と箱とをむやみに手に持ち替え、まるで何もかもが自分に悪意を抱いているかのように神経をひきつらせ、別れの感情にひたるゆとりもなかった。人形の箱をときどき頭を下に引きずるように運び、箱の中でなにやらずるずると動くような感触がしても、ただ腹を立てるばかりだった。新幹線の中では人形の箱を網棚に上げたまま、頭の表面だけがひりひりと覚めた生殺しのような眠りにうなされ、膝の上のハンドバッグをじっと抱えていた。身体がこわばりっぱなしで、物が考えられなかった。

東京駅に着いて、腑抜けのようになって通路を歩き出したとき、人に注意されてようやく網棚の上の人形を思い出した。人嫌いのあたしがこんな大きな人形とどうして暮していけるだろう、そのうちきっと人形にのさばられて毎晩部屋へもどりづらくなるから、と箱をそのままそこへ置いて逃げ出したいような気持になったものだ。

人形をタンスの上に飾ったのも、最初は伯父の優しさにたいする申訳にすぎなかった。狭い部屋の中に置くと人形は蔵で見た時の倍ほどの大きさに見え、一段と映えるあでやかさが、どうしようもなく場違いに感じられた。ちょうどベッドを見おろす位置になっていて、うっとうしいとは思ったが、どうせ次の日曜日にまた箱の中にしまってベッドの下へでも押しこむつもりだったので、人形の顔をちょっと左へ向けただけでそのままにしておいた。それが今では人形に向かって、泣かんばかりに訴えている。自分としては何の思い出もない人形に——。

戸籍の上でも独りになるについてはとうに覚悟はついているつもりだったのに、いざとなるといろいろ思いがけないことが出てきた。着いた翌日の月曜日の午前中に郁子はさっそく市役所へ行って手続

きを済ませてきた。母親は郁子の九歳の時に死んで、父親は一年ほどして新しい母親を迎えてすこし離れた町に移り、一年足らずで郁子は強情さをもてあまされて本家の伯父のところへあずけられ、そのまま居ついてしまった。子供心にも弱み僻みを見せまいとして郁子はますます勝気にふるまって、従弟たちの先頭に立って伯父に口答えしては頬を張られていたが、女の子のいない伯父はそんな郁子を我子と同じに可愛がってくれて、盆や正月にも実の父親のところへ挨拶に行けとは言ったが泊まってこいとは言わなかった。東京の大学へも出してくれた。

実父が死んだ時には、僅かなものだから腹違いの弟たちのために相続権を放棄しろと指図してくれた。大学を出たあとも言を左右して郷里にもどらず、縁談を片端から断る郁子を、帰省のたびに大声で怒鳴りつけながら、帰るまでに一度は早い夕飯のあとで郁子をそれとなく誘って馴染みの小料理屋へ連れて行き、息子どもは酒も呑みよらん、などと言って楽しそうにしていた。郁子のほうもそれにすっかり甘えて伯父との喧嘩の時には、呆気に取られている伯母や従弟たちの前で、思いきりやり返した。出て行け、出て行きます、は合言葉のようなものだった。

それが結局こうなってしまった。二年ほど前から、息子たちに相継いで独立され、酒のほうも病気で停められた伯父は郁子にたいして急にこらえ性をなくし、即刻郷里にもどって結婚するのでなければ二度とこの家の敷居をまたいでくれるなと迫りながら、郁子にもたれかかってくるようなところが見えてきた。我ながら薄情なもので、郁子はそうなると急に実の子ではない遠慮を覚えはじめ、いたずらに優しい賢い言葉をかけながら、伯父の前から後退りするようになった。お前が東京でやっていることは、生活などというもんじゃない、人さまに大目に見てもらっているだけだ、と伯父は説教のたびに言った。郁子はただうなだれていた。そのとおりだと思った。そのためにも、しっかり独立しなくてはいけないと思った。伯父はやがて郁子にたいしてめっきり口数がすくなくなった。郁子はひたすら伯父を言葉でいたわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com